

# 専修大学の グリーンのユニフォームに憧れ 必死の思いで両親を説得

日本卓球界の黄金期と言われる

昭和30年代。

その中心にいたのが、

世界選手権で2度もチャンピオンに輝いた

松崎キミ代さんです。

卓球との出会い、世界を制した当時の心境、

学生時代の思い出などを伺いました。

## 松崎キミ代さん

(昭36・商経商、現姓栗本)

まつざき きみよ ●香川県三豊郡高瀬町(現三豊市)出身。1961年商経学部商業学科卒。世界卓球選手権大会女子シングルス優勝(1959年ドルトムント大会、1963年ブラハ大会)、混合ダブルス優勝(1961年北京大会)、女子ダブルス優勝(1963年ブラハ大会)など、国内外の大会で数々の戦績を残し、日本の卓球界の黄金期を支えた。現在は関東学生卓球連盟会長、専修大学体育会卓球部緑生会会長、学校法人専修大学評議員、公益財団法人日本卓球協会顧問などを務めながら、後進の育成にも力を入れている。

松崎さんの著書

『卓球やらせて』『世界の舞台で』  
卓球レポート編集部(絶版)



## 美しい放物線、力強いフォームに 魅せられ卓球を始める

卓球との出会いは、小学校5年生の時でした。放課後に講堂の方からリズムミカルな音が聞こえてきたんです。行ってみると、村の青年2人が黙々と打ち合っていました。ロング対ロングの打ち合いなので放物線がとてもきれい。力強いフォームにも魅せられて、自分でもやってみたく思ったんですね。そして、中学に入ったら卓球をしようと決めたのです。

中学で卓球を始めたなら、それは楽しくて、夢中になってしまいました。しかし、私の家は酒屋で、私は6人きょうだいの一番上。配達などの手伝いをしなくてはなりません。家に帰るのが

遅くなると両親はカンカンです。「ピンポンなんかで遊んでいて、何の得になるんだ」とよく怒られてましたね。とにかく反対されながらだったので、少し後ろめたい気持ちもあって、中学2年に入ったら辞めようと思っていました。

## 卓球人生を決定づけた 2つの大きな分岐点

私には、2つの大きな分岐点がありました。1つが、中学2年生の時です。

その前年に、地元でソフトボール大会が開かれ、私は寄せ集めのメンバーのうちの一人として試合に出させてもらったんです。その後、2年生になった時に、当時の対戦相手の監督をしていた先生が卓球部の顧問として私の学校に赴任してきました。ある日、その

先生に呼ばれまして、私に「卓球部に入れ」というのです。先生は私のボールさばきを覚えていたようで、見込みがあると思ったのでしょう。私が卓球を辞めようと思っていることを話すと、「僕が両親を説得するから」とおっしゃったんです。そしてすぐに家に来て、「この子を香川県で1番にします」と両親を説得してくれたんです。もし、先生がいなかったら、私はそこで卓球を辞めていたでしょうね。これが1つ目の大きな分岐点です。

もう1つは、大学進学時。中学、高校では卓球にのめり込んだ私は、高校1年時のインターハイで、優勝候補に逆転勝ちして14位にランクされました。その時に、「好き」でやっていた卓球に対して、「もっと強くなりたい」と初めて思ったのです。

ちょうどそのころは、世界を舞台に日本選手が目覚ましい活躍をしていました。中でもひと際目立つグリーンのユニフォーム。富田芳雄さん、川井一男さん、女子団体が活躍していた渡辺妃生子さんなど、専修大学の選手がたくさんいました。しかも、足をよく動かす正統的なきれいな卓球。「専修大学に行きたい」と思いました。

だから、3年のインターハイで活躍して両親を説得することにしました。結果は2位。両親も喜んでくれて、これなら大丈夫だろうと思っていたのですが、「酒屋に大学出はられない」と突っぱねられました。それでも私は諦められませんでした。だったら行動で示そうと思い、毎朝、近くにある高瀬富士という山に登ってから学校に行くことにしました。私が飽きっぽい性格なのを両親は知っていますが、それを毎日続けることで、本気だと分かってくれました。

すると、父親から「専修大学に行け」と認めてもらうことができました。これが2つ目の分岐点。専修大学に進学



生田キャンパス正門近くの道場で  
厳しい練習に汗を流す毎日

当時の卓球道場は、生田キャンパスの正門に入ってすぐ右の方にあったといえます。「守衛さんがいつもいるので、24時間練習ができました」と松崎さん。写真は当時の様子です。「朝6時に起きて、まずは道場の清掃から始まります。暇があればラケットを握っていましたし、時間があればいつも卓球のことを考えていました」

できることになった瞬間です。

## 卓球界の黄金期を支えた 専修大学の選手たち

当時の専修大学はそうそうたる先輩方がいました。OBも含めると世界選手権に出た人がたくさんいて、まさに日本の卓球界を引っ張っていました。

渡辺妃生子さんには、「世界選手権に行くなら、補欠で行ってはダメ。エースで頑張らなければつまらない」と言われました。私は補欠でもいいから世界選手権に出たいと思っていたので、それ以来、目標を立て直しました。

1959年の世界選手権ドルトムント大会ではシングルスと団体で2冠。この時は、選抜メンバーでは最年少だったのですが、エース格で行かせてもらいました。さらに1961年の北京大会では混合ダブルス、女子団体が優勝することができました。

でも、大学時代に一番嬉しかった試合は、1959年の全日本選手権での優勝です。相手は前回の世界選手権個人優勝の江口富士枝さん。勝った時に初めて、「これでやっと香川の家に帰れる」と思ったのを覚えています。どこかで、芽が出ないまま故郷には帰れないと思っていたのです。

私は小さいころから負けず嫌い。常に負けたくないという気持ちでプレーしていました。

## 日中の架け橋となり、 中国の卓球のレベルアップにも貢献！?

1961年の世界選手権北京大会から始まった、松崎さんと周恩来総理の交流は、その後も続きました。選手引退となったブラハ大会の後には、周総理から「3種目優勝おめでとうございます。これからも選手を続けてください。もし引退するなら、中国で指導をしてください」と電報をもらったそうです。その後は中国に何度も招かれ、ジュニアの選手の指導にあたった松崎さん。本人は謙遜ですが、「中国の卓球を強くしたのは松崎さん」という逸話は本当かもしれません。



だけど不思議なことに、私の場合、「これで勝てるな」と思うと必ず負けるんです。もちろん「負ける」と思ったら負けてしまう。だから、「負けると思うな、勝てると思うな」が私のお題目でした。そして、「その一球に集中すること」を常に考えていました。

「この一球」は私の座右の銘でもあります。練習の最初の一球目から全てを集中してやる。そうやって、試合の最後の「ここぞ」の一球を確実にとれるようにするのです。途中でミスがありますが、そのミスは絶対に覚えておき、意味のあるミスにする。

これは、いろいろなことにも通じる考え方ではないかなと思っています。

## 周恩来総理の心を打った 技術とフェアプレーの精神

スポーツはなんでもそうですが、卓球もただ強いだけではダメで、マナーがよくなければいけません。富田芳雄さんはその意味で私の憧れでした。フェアプレー精神に徹していました。試合で負けたとしても、ボールを拾うより先に相手選手のところに行き、握手をするんです。先輩の姿を見て、「私も強くなったらあなりたい」と思いました。そして、実はこれが世界選手権北京大会での周恩来総理との出会いに繋がったんです。

大会当日の日中関係は非常に悪くて、



## 校友会100周年への お祝いメッセージ

「Adonis」をめぐるたびに、たくさんの方の校友がいることが感じられるので楽しみにしています。校友の方々の活躍は、私にとっても大きな刺激になりますし、何より嬉しいもの。他のつながりの友人たちとは違う、特別な気持ちになります。専修大学で得たことは、私の人生を大きく広げてくれました。これからも後進の育成に務めながら、私なりに日本の卓球界を盛り上げていければと思っています。

中国での反日感情はすごいものがありました。試合をしていても、観客1万5,000人が日本の相手国の選手を応援します。そんな中で、準決勝で私は負けてしまっているのですが、そこで真っ先に相手選手のところに駆け寄り握手しました。

それを覚えていてくれたのでしょうか。大会後に開いてくださった送別会のスピーチの中で、「松崎さんの試合は地方のテレビで観ましたが、中国人民に深い印象を残しました。あなたは負けたが1番です(3番ではなく)」と言ってくさいました。さらに、父親のためにマオタイ酒をプレゼントしてくれたんです。そこからですね、総理とは何度も交流させていただくようになりました。

先日の世界選手権での日本選手の活躍は記憶に新しいところですが、本当に今の日本は選手が若返りました。楽しみな選手がたくさんいます。私はスピーチをさせていただく際には必ず、「技術も大切ですが、マナーにも気をつけてやってほしい」と話すのですが、私は卓球に出合ったことで、語り尽くせないくらい、いろいろな経験をさせてもらいました。卓球に出会えたことは、私の人生において本当に素晴らしいことでした。その恩返しというわけではありませんが、一人でも多く世界に出て行く選手を育て、サポートしていきたいと思っています。(談)